

令和六年度

適性検査Ⅰ

9 : 15

～

10 : 00

〔注意〕

- 1 この問題冊子さつしは一ページから二十一ページにわたって印刷してあります。ページの抜け、白紙、印刷の重なりや不鮮明な部分ふせんめいなどがなく、確認かくにんしてください。あつた場合は手をあげて監督かんとくの先生の指示にしたがつてください。
- 2 解答用紙は二枚まいあります。受験番号と氏名をそれぞれの決められた場所に記入してください。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙を二枚とも提出してください。
- 5 解答用紙のマス目は、句読点などもそれぞれ一字と数え、一マスに一字ずつ書いてください。
- 6 字ははっきりと書き、答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書いてください。
- 7 文章で答えるときは、漢字を適切に使い、丁寧ていねいに書いてください。

横浜市立

南

高等学校附属中学校

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校

1 りかさんとみなみさんが図書館で社会の授業の話をしています。りかさんとみなみさんの【会話】や【資料】を読み、あとの問題に答えなさい。

【会話 1】

りかさん：今日の社会の授業で、ヨーロッパの国の学習をしましたね。

みなみさん：はい。スペインには【SIESTA（シエスタ・昼の休憩^{きゅうけい}）】という文化があるのですね。

りかさん：スペインといえば、【SOBREMESA（ソブレメサ）】というスペイン語を知っていますか。

みなみさん：いいえ、知りません。それはどういう意味なのですか。

りかさん：「食後に食卓^{しょくたく}を囲んで、くつろいでおしゃべりをする」という習慣を指す言葉です。

みなみさん：スペインでは、午後2時ごろに昼食をとり、【SIESTA】や【SOBREMESA】をはさみ、また仕事にもどるのですね。

りかさん：はい。その国の言葉にはその国の文化が反映^{はんえい}されているのですね。

みなみさん：外国の言葉について興味が出てきました。少し調べてみませんか。

りかさん：そうですね。調べてみましょう。

みなみさん：わたしはこのような言葉を調べてきました。【資料 1】を見てください。

【資料 1】 みなみさんが見つけてきた言葉

SKÁBMA（スカーマ）

太陽の出ない季節

（吉岡^{よしおか} 乾^{のほる}「なくなりそうな世界のことば」をもとに作成）

りかさん：【SKÁBMA】で「太陽の出ない季節」を表すのですね。

みなみさん：はい。日本語にはない表現で、特に気になりました。

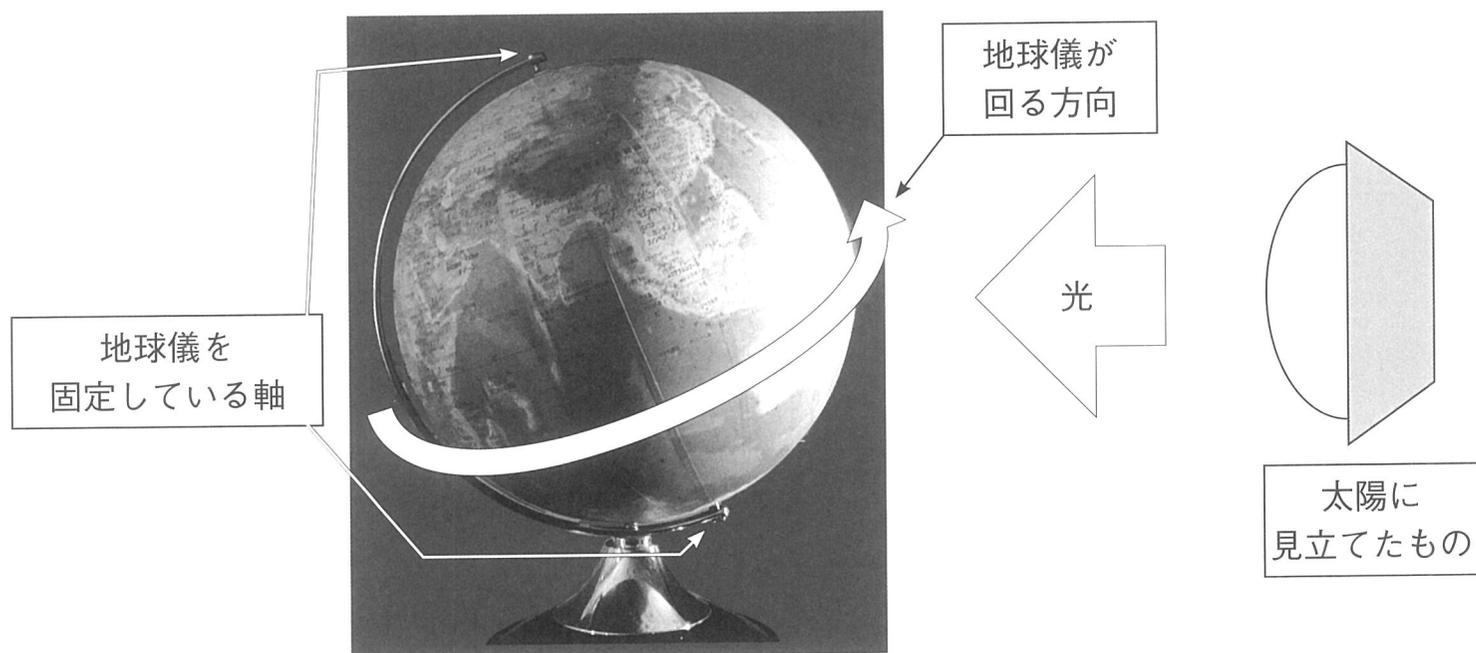
りかさん：確かに、日本にはない季節ですね。これはどこで使われている言葉なのですか。

みなみさん：これは【資料2】を参考に考えてみると、わかりやすいです。【資料2】は地球儀に、太陽の光に見立てた光を当てているところを表したものです。

りかさん：地球儀を、【資料2】中の「地球儀を固定している軸」を中心^{じく}に回すと、一周しても太陽の光が当たらない地域^{ちいき}がありますね。

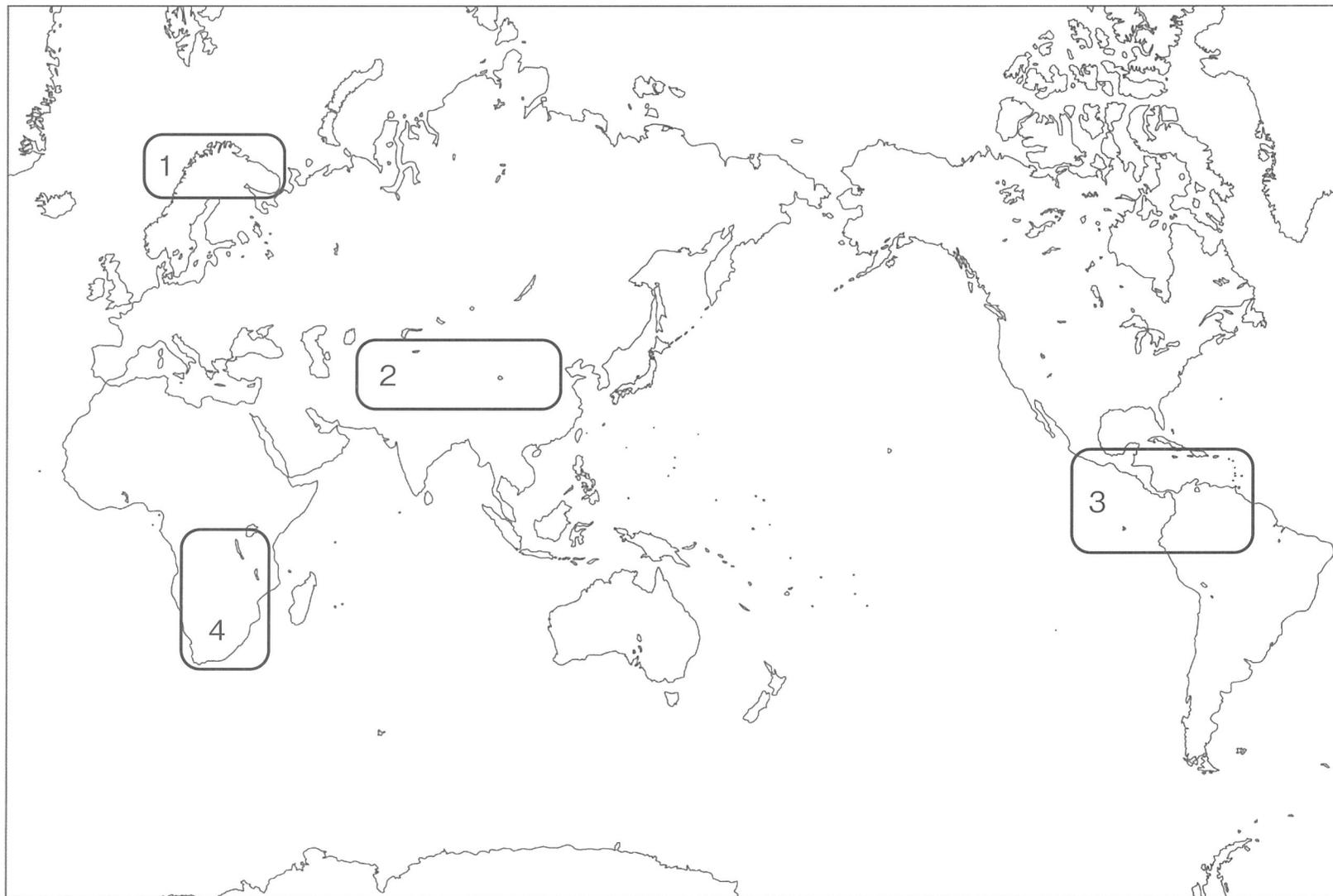
みなみさん：はい。そこが①「太陽の出ない季節」という言葉が使われている地域です。

【資料2】地球儀に太陽の光に見立てた光を当てている図



問題1 【会話1】中の①「太陽の出ない季節」という言葉が使われている地域として最も適切な地域を次の【地図】中の1～4から一つ選び、番号を書きなさい。

【地図】



【会話2】

りかさん：わたしは少し変わった言葉を見つけました。【資料3】の言葉を見てください。

【資料3】りかさんが見つけてきた言葉

PISAN ZAPRA (ピサンザプラ)
バナナを食べるときの所要時間

(エラ・フランシス・サンダース「^{ほんやく}翻訳できない世界のことば」をもとに作成)

みなみさん：「バナナを食べるときの所要時間」を表す言葉があるのですね。30秒くらいですか。

りかさん：人やバナナによりますが、約2分らしいです。どこで使われている言葉だと思いますか。

みなみさん：バナナが栽培^{さいばい}されている地域で使われていると思うのですが…。

りかさん：はい。バナナの栽培条件について調べた【資料4】を見てください。

【資料4】りかさんが調べたバナナの栽培条件

- ・高温多湿^{たしつ}な土地に育つ
- ・気温27～31℃くらいがいちばん元気に育つ
- ・暑い季節は毎日しっかり水やりをする

(農山漁村文化協会「知りたい 食べたい 熱帯の作物 バナナ」をもとに作成)

みなみさん：条件に当てはめると、【PISAN ZAPRA】が使われている地域の気温と降水量^{こうすい}を表しているグラフは

② ですね。

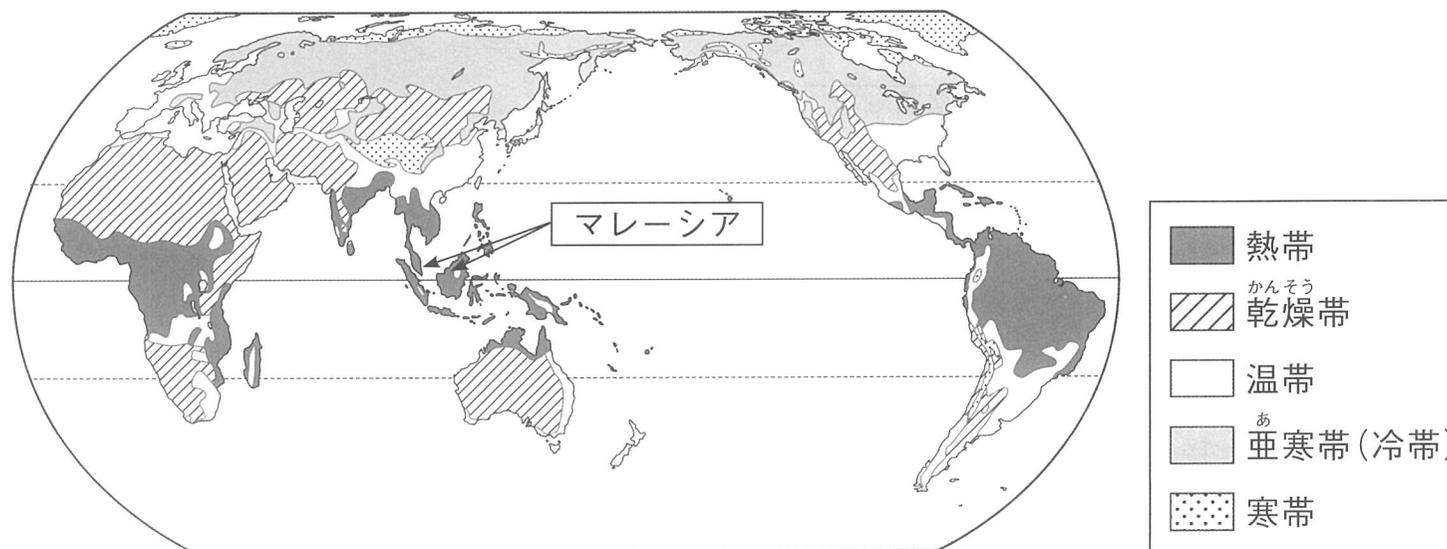
りかさん：はい。【PISAN ZAPRA】は、マレーシアやシンガポールなどで話されているマレー語の言葉です。同じ気候の地域で【資料5】の③が育てられていますね。

【資料5】 コーヒー、オリーブ、小麦の生産量の上位5か国（2020年 単位：千t）

コーヒー		オリーブ		小麦	
ブラジル	3700	スペイン	8138	中国	134250
ベトナム	1763	イタリア	2207	インド	107590
コロンビア	833	チュニジア	2000	ロシア	85896
インドネシア	773	モロッコ	1409	アメリカ	49691
エチオピア	585	トルコ	1317	カナダ	35183

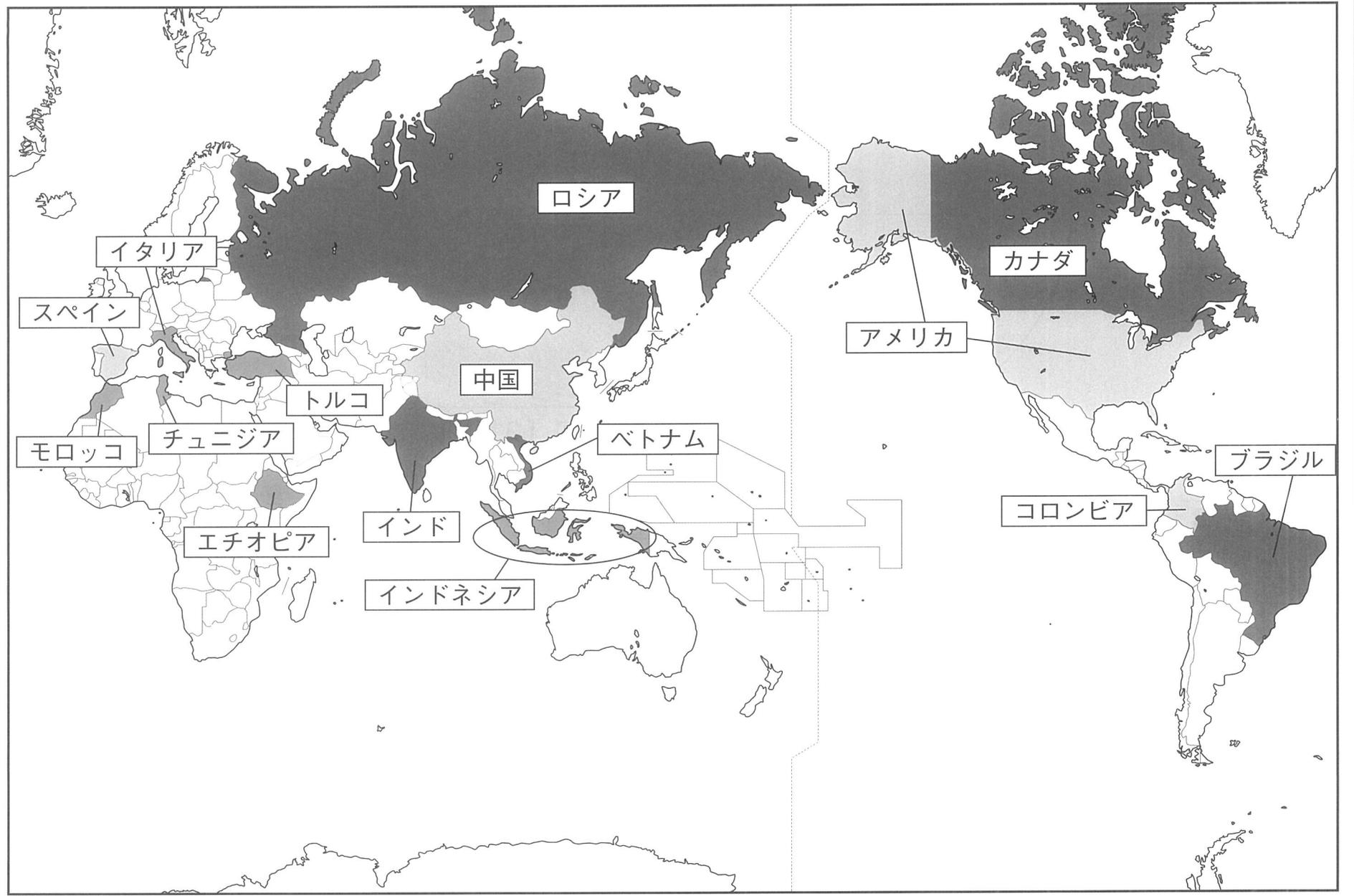
（「世界国勢図会 2022/23」をもとに作成）

【資料6】 世界の気候について表した地図

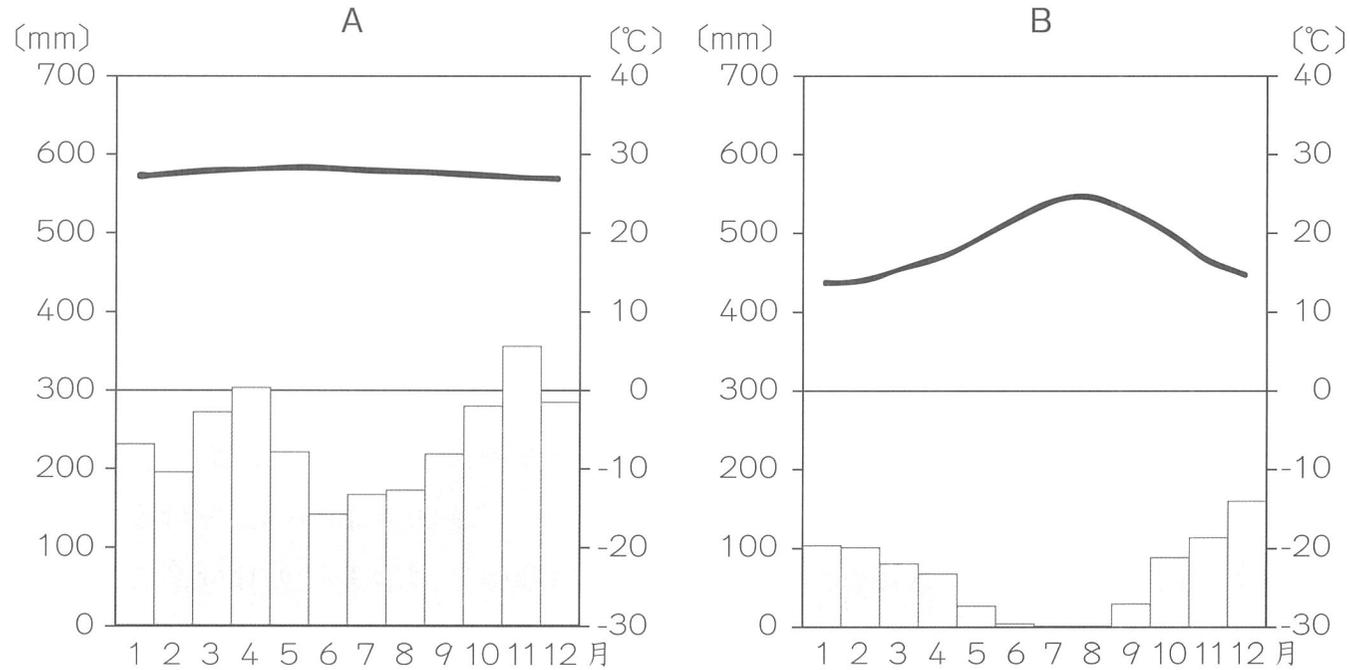


（明治図書「よくわかる社会の学習 地理I」をもとに作成）

【資料7】 【資料5】 中のコーヒー、オリーブ、小麦が作られている国々



問題2 【会話2】中の②にあてはまる気温と降水量こうすいのグラフを次のAとBから選び、【会話2】中の③にあてはまる作物との組み合わせとして最も適切なものを、【資料5】～【資料7】を参考にしてあとの1～6から一つ選び、番号を書きなさい。



(国立天文台編「理科年表2023」をもとに作成)

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1 Aとコーヒー | 2 Bとコーヒー | 3 Aとオリーブ |
| 4 Bとオリーブ | 5 Aと小麦 | 6 Bと小麦 |

【会話3】

みなみさん：日本にバナナが広まったのは1900年ごろに行われた台湾たいわんからの輸入がきっかけです。

りかさん：そうなのですね。台湾は日清戦争にっしんの結果、④下関条約しものせきによって、日本の領土になっていましたね。

みなみさん：日清戦争は甲午農民戦争こうごという争いがきっかけで起こったと本で読んだことがあります。

りかさん：はい。この「甲午」というのは、十千十二支じっかんからきています。【資料8】を見てください。

みなみさん：これで歴史上のできごとが起こった年を算出することもできますね。

りかさん：この時期に台湾からバナナが輸入されていた主要な港はどこだったのですか。

みなみさん：⑤門司港もじこうだと言われています。この当時、同じ県内に八幡製鉄所やはたもでき、台湾にも地理的に近いことで、ずいぶんずいぶんにぎわっていたようです。

りかさん：【資料9】にある県ちくほうたんでんですね。筑豊炭田などの地理的な条件を生かして、のちに工業地帯ができていきますね。

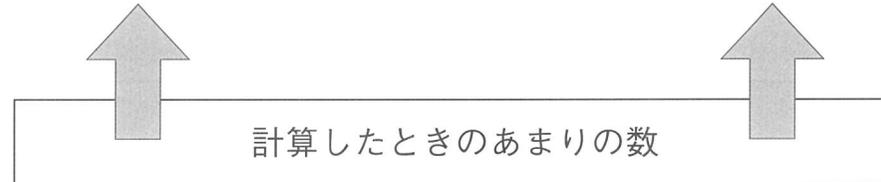
【資料8】 十干十二支と西暦^{せいれき}を利用して十干十二支を算出するときの手順

十干

	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
読み方	こう	おつ	へい	てい	ぼ	き	こう	しん	じん	き
	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと
	4	5	6	7	8	9	0	1	2	3

十二支

	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
読み方	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い
	し	ちゅう	いん	ぼう	しん	し	ご	び	しん	ゆう	じゅつ	がい
	4	5	6	7	8	9	10	11	0	1	2	3



手順1 西暦年を10でわる。そのあまりの数から十干を特定する。

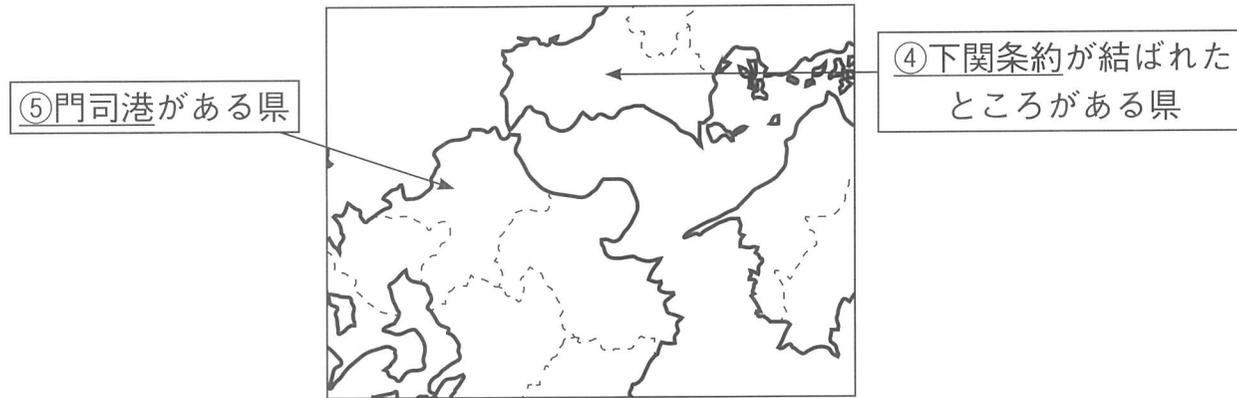
手順2 西暦年を12でわる。そのあまりの数から十二支を特定する。

例) 甲子園^{こうしえん}球場の建設(1924年)

$$1924 \div 10 = 192 \text{ あまり } 4 \text{ (十干 甲)}$$

$$1924 \div 12 = 160 \text{ あまり } 4 \text{ (十二支 子)}$$

【資料9】 【会話3】 中の④^{しものせき}下関条約が結ばれたところがある県、⑤^{もじこう}門司港がある県



問題3 【資料8】を参考にして、672年と1868年に起こったできごとを次の1～6からそれぞれ一つずつ選び、番号を書きなさい。

- 1 高野長英が幕府の外国船への対応について「戊戌夢物語」を書いた。
- 2 豊臣秀吉が朝鮮への出兵を命じ、文禄の役（壬辰倭乱）が起こった。
- 3 中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我氏をほろぼした乙巳の変が起こった。
- 4 新政府軍と旧幕府軍が戦った戊辰戦争が起こった。
- 5 大海人皇子と大友皇子が次の天皇の位をめぐって争った壬申の乱が起こった。
- 6 清をたおし、近代国家をつくろうとした辛亥革命が起こった。

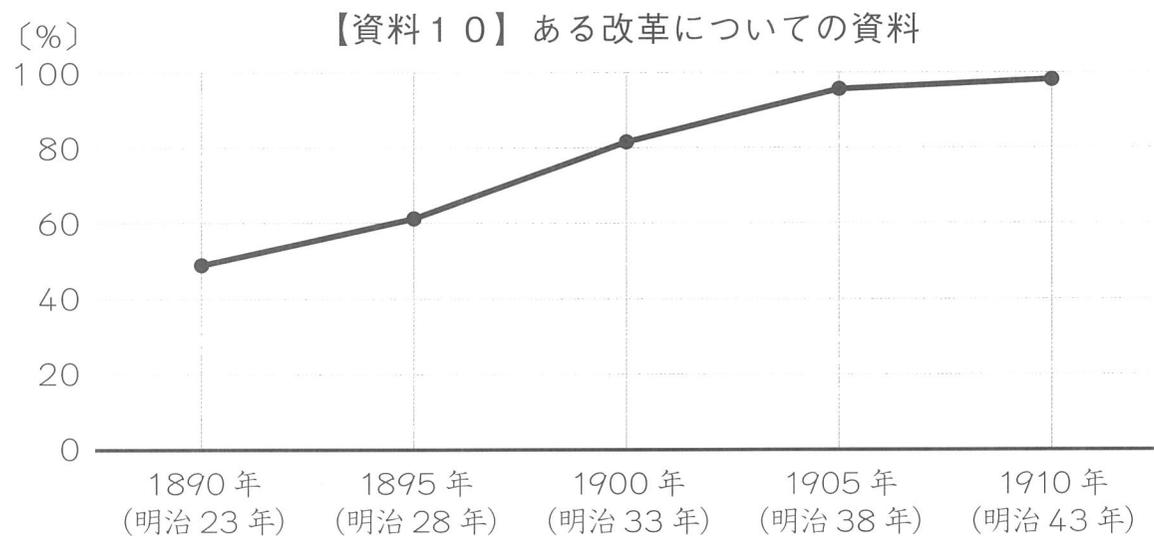
問題4 【資料9】中の④下関条約が結ばれたところがある県と⑤門司港がある県の2つの県以外で起こったことを次の1～4から一つ選び、番号を書きなさい。

- 1 中国（漢）の皇帝から与えられた金印が発見された。
- 2 源氏が壇ノ浦の戦いで平氏をほろぼした。
- 3 元との戦いに備えて防塁がつくられた。
- 4 ポルトガル人が漂着し、鉄砲が伝わった。

【会話4】

みなみさん：1900年といえば、明治時代ですね。この時代にはいろいろな^{かいかく}改革が行われました。

りかさん：はい。【資料10】はこの時代の改革についての資料です。これは⑥を表しています。



(文部科学省のホームページをもとに作成)

みなみさん：今では当たり前のように思えることも、昔はちがったのですね。

りかさん：わたしたちが何気なく食べているものも、歴史的な^{はいけい}背景があるのですね。

みなみさん：言葉の話から始まり、ずいぶんと大きなスケールの話になりましたね。

りかさん：これからは知らない言葉や外国の言葉を聞いたらいろいろ考えてみたいと思います。

みなみさん：そうですね。^{たんきゅう}探究に終わりはありませんね。

問題5 【会話4】中の⑥にあてはまる言葉として最も適切なものを次の1～4から一つ選び、番号を書きなさい。

- 1 徴兵制ちょうへいにもとづいて兵役へいえきについての人の割合わりあいの変化
- 2 学制にもとづいて小学校に通った子どもの割合の変化
- 3 殖産興業しよくさんこうぎょうの政策せいさくにもとづいて工場こうじょうで働いた人の割合の変化
- 4 古い身分制度ぶんぶんせいどの廃止はいしにもとづいて平民へいみんとされた人の割合の変化

問題6 リカさんは日本や外国の言葉に興味をもち、さらにくわしく調べることにしました。その際に大切だと考えられることはどのようなことですか。次の【条件】にしたがって書きなさい。

【条件】

- 1 本文中の【会話1】～【会話4】の内容をふまえて書きなさい。
- 2 「その国の言葉を調べるときには」に続けて「が大切です。」へつながる一文になるように書きなさい。
- 3 10字以上、20字以内で書きなさい。(読点も字数に数えます。)

2 りかさんは、キリンの研究をしている郡司さんの本を見つけました。【資料1】はその本の一部です。【資料1】を読んで、あとの問題に答えなさい。

【資料1】

筋肉の名前

※1 シロの解剖では、※2 ニーナの時とは違うことが2つあった。

まず1つは、今回は1人じゃないということだ。※3 研究室の院生さん※4 に加えて、国立科学博物館の研究員の方が解剖に参加していたのだ。しかもその方は、鳥や爬虫類の首を研究している「首のスペシャリスト」だ。質問できる相手がいるというのは、なんとありがたいことだろうか。

そしてもう1つは、言うまでもないが、「今回が初めての解剖ではない」ということだ。前回の解剖できちんと特定できた筋肉は1つもなかったけれども、ニーナのおかげで、どういう風に筋肉の束が並んでいるか、大雑把な筋肉の構造は頭に入っていた。腱がどのように通っているかもなんとなく記憶しているので、筋膜を外すとき、どこに気をつければいいのか見当をつけることもできそうだ。

大失敗に終わったと思っていたニーナの解剖だったけれど、きちんと自分の中に知識は蓄積している。そう思えたのが本当に嬉しかった。前回の反省を生かし、筋膜と一緒に腱を外してしまわないよう、丁寧に慎重に作業を進めていく。

皮膚を剥がし筋膜を取り除くと、数日前に見たばかりの構造が、前回よりは多少きれいな状態で目の前に広がっていた。今度こそ、どれが何筋かちゃんと特定しよう。気合いを入れ直して、横のテーブルに解剖図のコピーを広げる。

板状筋、頸最長筋、環椎最長筋……教科書に列挙された筋肉を1つずつ確認し、筋肉がどの骨とどの骨を結んでいるかを確認する。教科書に書かれた各筋肉の説明文をじっくり読み、描かれた解剖図と目の前のキリンを見比べながら、どれが何筋なのかの特定を試してみる。

しかし、やっぱりよくわからない。キリンの首の一番表層には、細く長い紐状の筋肉が多数存在しているのだが、教科書に載っているウシやヤギの筋肉図にはこのような紐状の筋肉が描かれていないのだ。

自分1人で考えていても埒があかない。今回は1人じゃなく、首の解剖のスペシャリストがいるのだ。わからないなら、教えてもらえばいいじゃないか。そう思い、「これって何筋ですか？ 板状筋か頸最長筋だと思うんですが……」と尋ねてみた。

すると、科博の研究員の方からは予想外の答えが返ってきた。

「うーん、わからないなあ。まあ、筋肉の名前は、とりあえずそんなに気にしなく

てもいいんじゃない？」

相手は、キリンの解剖は初めてとはいえ、私よりもはるかに解剖経験がある、首の構造を専門とする研究者だ。てっきり「これは何とか筋だよ」と答えを教えてもらえると思っていた私は、言われた言葉の意味がすぐには理解できなかった。すると研究員の方は続けてこう言った。

「名前は名前だよ。誰かがつけた名前に振り回されてもしょうがないし、自分で特定できればいいじゃない。次に解剖したときに、これは前回〇〇筋って名付けたやつだな、って自分でわかるように、どこどこをつなぐ筋肉かきちんと観察して記録しておけばいいでしょ」

ノミナを忘れよ

解剖には、専門用語が多い。筋肉の名前だけでも、400語以上にもなるそうだ。解剖ができるようになるためには、まずはこれらの名前を正確にしっかりと覚えなければいけないと思っていた。

なので、この時に言われた「名前は気にしなくていいんじゃない？ もしかわからないなら、自分で名付けてしまいなよ」という言葉には心底驚いた。実をいうとその時は、「そんなことでは、いつまでたっても解剖ができるようにならないのでは……」と思った。

ところがこれ以降も、さまざまな解剖学者の先生方から、これに近い言葉を何度も言われている。2017年、2018年に参加した人体解剖の勉強合宿では、先生から幾度も「ノミナを忘れよ」と念を押された。ノミナ≡NOMINAとは、ネーム、つまり「名前」という意味をもつラテン語である。筋肉や神経の名前を忘れ、目の前にあるものを純粋な気持ちで観察しなさい、という教えた。

筋肉の名前は、その形や構造を反映していることが多い。例えば、首にある板状筋は文字通り板状の平べったい筋肉だし、お尻にある梨状筋はヒトでは梨のよな形をしている。腹筋はおなか側にあるノコギリのようにギザギザした形をもつ筋肉で、上腕頭筋は上腕と頭を結ぶ筋肉だ。

こうした筋肉の名前は、基本的にヒトの筋肉の形や構造を基準に名付けられている。そのため、ほかの動物でも「その名の通り」の見た目をしているとは限らない。多くの動物では梨状筋は梨っぽい形をしていないし、キリンの上腕頭筋は上腕から首の根本部分に向かう筋肉であり、頭部には到達しない。

解剖用語は「名は体を表す」ケースが多いがゆえに、名前を意識し過ぎてしまふと先入観にとらわれ、目の前にあるものをありのまま観察することができなく

なってしまうのだ。頭と腕をつなぐ筋肉を探していたら、いつまでたってもキリンの上腕頭筋は見つけられない。

優れた観察者になるために

筋肉や骨の名前は、理解するためにはあるのではない。目の前にあるものを理解した後、誰かに説明する際に使う「道具」である。そして解剖の目的は、名前を特定することではない。生き物の体の構造を理解することにある。ノミナを忘れ、まずは純粋な目で観察することこそが、体の構造を理解する上で何より大事なことである。

当時の私はこのことに気がついておらず、名前を特定することが目的化し、まさに名前に振り回されていた。上腕頭筋を見つけようと上腕と頭を結ぶ筋肉を探していたし、教科書に「この筋肉は2層に分かれ」と書かれていたら、2層に分かっている筋肉を見つけようとしていた。目の前にあるキリンの構造を理解するために観察するのではなく、横に置いた教科書に描かれた構造を、キリンの中に探し求めてしまっていたのだ。

「自ら理論立てて考える人でなければ、優れた観察者にはなれない」というのは、かの有名なチャールズ・ダーウィンの言葉だ。この時の私は、理論立てて考えながら解剖をしていなかった。

名前の特定にこだわることを一旦やめてみよう。そう思い、気を取り直してシロの遺体に向き直る。目の前の筋肉がどの骨とどの骨をつないでいるのか。その筋肉が収縮したら、キリンの体はどんな風に動くのか。大きい筋肉なのか、小さい筋肉なのか。長いか、短いか。筋肉の名前を1つも知らなくても、目の前に実際にキリンの遺体があるのならば、考えることはいくらでもある。

そうして初めて、自分が教科書ばかり眺めて、キリンの方をあまり見ていなかったことに気がついた。せっかくキリンの遺体が目の前にあるのに、きちんと向き合っていないような気がした。

解剖台の横にノートを開き、名前もわからぬ「謎筋A」の付着する場所、走行、大きさ、長さを丁寧に観察し、記録していく。次の解剖でも「謎筋A」であることがわかるよう、筋肉の特徴をなるべく細かく描き込んでいく。名前を特定しようとしていた時はずっと真っ白だったノートが、文章やスケッチで埋められていく。

ようやく頭を使って解剖することができるようになった瞬間だった。

(郡司 芽久「キリン解剖記」より。一部省略やふりがなをつけるなどの変更があります。)

- ※1 シロ……………筆者が解剖した2体目のキリン。
- ※2 ニーナ……………筆者が数日前に初めて解剖したキリン。
- ※3 研究室……………東京大学の遠藤秀紀研究室。
遠藤秀紀(一九六五年―)は動物の解剖研究で有名な研究者。
- ※4 院生……………この場合は大学院生の略称。
- ※5 腱……………筋肉と骨をつないでいる繊維状の丈夫な組織。
- ※6 筋膜……………筋肉を包む伸縮性のある薄い膜。
- ※7 埒があかない……………ものごとのきまりがつかなくて、先へすすまない。
- ※8 科博……………国立科学博物館の略称。
- ※9 心底……………心のそこから。
- ※10 チャールズ・ダーウィン
……………一八〇九―八二年。イギリスの博物学者。
「種の起源」で進化論を説いた。
- ※11 走行……………筋肉の連なりやその向き。

問題1 「科博の研究者」が——線「筋肉の名前は、とりあえずそんなに気にしなくてもいいんじゃない？」と言ったことをきっかけに、筆者が気づいたこととして最も適切なものを、次の1〜4から一つ選び、番号を書きなさい。

- 1 生き物の解剖かいぼうでは、体の構造を理解することを通して、神経の名前を特定することが重要だということ。
- 2 科博の研究者にとってキリンは専門外せんもんがいの分野であるので、体の構造の観察は重要ではないということ。
- 3 生き物の体の構造を理解するには、目の前にあるものをありのままに観察することが重要だということ。
- 4 「名は体を表す」というように、筋肉の名前は体の構造を表していると理解することが重要だということ。

りかさんが見つけた【資料1】を読んだみなみさんは共通する考えがあると思い【資料2】を持ってきました。【資料2】を読んで、あとの問題に答えなさい。

【資料2】

突然ですが、最近、美術館に行かれましたか？

よく行っている人もいれば、もう何年も行っていないという人もいるかもしれませんが、みなさんは美術館に行ったとき（あるいは本などでアート作品をみるとき）、作品をどのように「鑑賞」しているでしょうか。

美術館の学芸員として、来館者が鑑賞する姿を日々目にしていく中で、明らかに多くの人に共通する傾向があります。

作品の横や下に添えられた解説文を、まず熱心に読むことです。

作品のタイトル、作者名、そしてどのような背景のもと、どんな意図をもって制作した作品なのか。何がどのように描かれていて、世間でどう評価されているのか。作品にまつわる情報を、一つ一つ丁寧に読まれる方がとても多いのです。

もちろん、読んでもらうために用意しているので、読んでいただけるのはよいのですが、中には、作品そのものをみている時間よりも、解説を読んでいる時間のほうが長いのでは？ と感じる鑑賞者もいます。みなさんは、いかがでしょうか？

MOMAの調査でもこうして得た知識のほとんどが美術館を後にする時には人々の頭の中から消えている、つまり、定着していかないことがわかっていきます。作品をみるよりも解説文を読むことを、悪いとか、間違いだとか言うつもりはありません。が、展示を企画する側としては、作品に関する「情報」を提供する以上に、豊かな「鑑賞」の体験を提供したい……そんな思いがあります。

それでは、豊かな鑑賞の体験は、どうすれば可能なのでしょうか。そもそも豊かな鑑賞とは、どのようなものなのでしょうか。

以前、あるテレビ番組で、エドヴァルド・ムンクという画家の《叫び》という作品の画像を、東京の街頭でみせて、道行く人に「どう思いますか？」と感想を聞いている場面をみたことがあります。インタビュアーに答えていたのは日本人でしたが、「あ、ムンク」と画家の名前を答える人、「《叫び》ですね」と作品名を答える人、あるいは自分の頬に手を当てて、おもしろおかしく叫ぶ姿を真似てみせる人がほとんどでした。

番組を続けてみると、今度は場面が東京からムンクの故郷、ノルウェーのオスロの街に移りました。そして同じようにムンクの《叫び》についてインタ

ビューが始まったのですが、私は驚きました。オスロの街の人たちからは、「ムンク」という画家名も《叫び》という作品名もあまり出てきませんでした（時折、忘れていた人もいました）。しかし、その代わり、老若男女を問わず、いろんな感想が出てきたのです。

美術館で作品をみた後（あるいは映画を観たり小説を読んだりした後）、私たちはその作品についてどれくらいのこと気づいたり考えたりできるでしょうか。そして、どれくらい自分の言葉で語れるでしょうか——豊かな鑑賞ができるかどうかは、どうやらここに関わっているように思います。

ところが、私たちは美術館で作品をみるとき、解説文を読み、作品を「知る」ことにまず意識を向けていることが多いようです。自分の心に耳を澄ませるよりも、書かれてある情報を得ることを優先しがちなのです。

解説文は、作品への理解を深める手掛かりになるでしょう。しかし、情報を「知る」ことを意識し過ぎるために、作品をまず自分の目で「みる」ことができなくなってしまう面があるのではないのでしょうか。

中学生や高校生の頃の美術の時間を憶えているでしょうか？

学校によってまちまちかもしれませんが、私は、美術作品について「□□□□という画家が、△△△時代に制作したもので、○○○という技法が使われている」といった解説を先生から聞かされ、それがテストに出題されたことを憶えています。実際に作品を創る時間は楽しかったのに、情報を記憶したかどうかを問われるテストがあるために、美術の時間の魅力が少し損なわれたような気もします。作品の「鑑賞」について何か学んだことがあったかと自問すると、何も答えられません。

日本の学校教育はこれまで「知識偏重」で、ものごとを暗記することばかり重視しているという批判がありました。歴史の年号を覚えたりする類のことがよく例に挙げられますが、美術という本質的に「正解」がないような分野でさえ、知識を得ることを重視する授業が行われてきたのが実状ではないのでしょうか。

私たちがアート作品そのものを眺める以上に、その解説文を熱心に読んでしまいがちなのは、そのことに関係しているのかもしれませんが。

鈴木 有紀「教えない授業 美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方」より。一部省略やふりがなをつけるなどの変更があります。

- ※1 学芸員……博物館資料の収集、保管、展示、調査研究を行う博物館職員。
- ※2 MOMA……ニューヨーク近代美術館のこと。マンハッタンにある。
- ※3 エドヴァルド・ムンク
……十九世紀―二十世紀のノルウェー出身の画家。
- ※4 《叫び》……エドヴァルド・ムンクが制作した油彩絵画作品。

問題2 【資料1】【資料2】に共通する考えを、次の【条件】【書き方の注意】にしたがって説明しなさい。

【条件】

- 1 三つの段落で構成し、三百四十字以上四百字以内で書くこと。
- 2 三つの段落それぞれの内容は次のようにすること。

第一段落	【資料1】【資料2】に共通する考え
第二段落	共通する考えが【資料1】では具体的にどのようなように述べられているか
第三段落	共通する考えが【資料2】では具体的にどのようなように述べられているか

【書き方の注意】

- 1 題名、名前は書かずに一行目、一マス下げたところから、書くこと。
- 2 段落を作るときは改行し、一マス下げたところから、書くこと。